

わたしたちの身近な文化財

描かれた江戸時代の小平 — 「小川村地割図」(その1) —

私たちの住む小平がある場所は、江戸時代前期の明暦2(1656)年に小川九郎兵衛によって小川村(はじめは小川新田)の開拓が着手されるまでは、一面の広野だったようです。このため、これより前の正保年間にできた『武蔵国国絵図』(1644年)の青梅街道沿いには、小川村の名はなく、開拓後の、元禄年間の国絵図(1696年)には「小川新田」の名が見られます。文政13(1830)年に発行された『新編武蔵国風土記稿』には「正保年中改訂図」「元禄年中改訂図」という図がのっていますが、それぞれ正保年間、元禄年間の国絵図から作られたものです(図1)。



〈図1 「正保年中改訂図」(左)「元禄年中改訂図」(右) (『新編武蔵国風土記稿』)に加筆

さて、小川村の開拓が始まってから20年ほど後には、この小川村を色鮮やかに描いた絵図が作られています。これが『小川村地割図』で、これまで道路や用水のお話の時に何度も出てきたものです(図2)。今年になって、この絵図をお持ちだった小川九郎兵衛の子孫の方から小平市に寄附され、今では小平市中央図書館に大事に保管されています。

地割図は6枚の紙を貼り合わせて作った縦57.8cm、横124.5cmの横に細長い大きなもので、中央を左右に走るオレンジ色の太い線が今の青梅街道です。この部分には「御江戸海道」という道の名のほか、「小川新田村」と書かれています。江戸時代中頃の享保9(1724)年に始められた武蔵野新田開発で小川新田ができる前なので、まだ「小川新田」と呼ばれていたことがわかります。

青梅街道の上下には、街道から直角に並んだ細長い地割(土地の区画)があります。これが、ちょうど和歌や七夕の願い事を書く細長い紙の短冊を並べたように見えるので「短冊形地割」と呼ばれるものです。

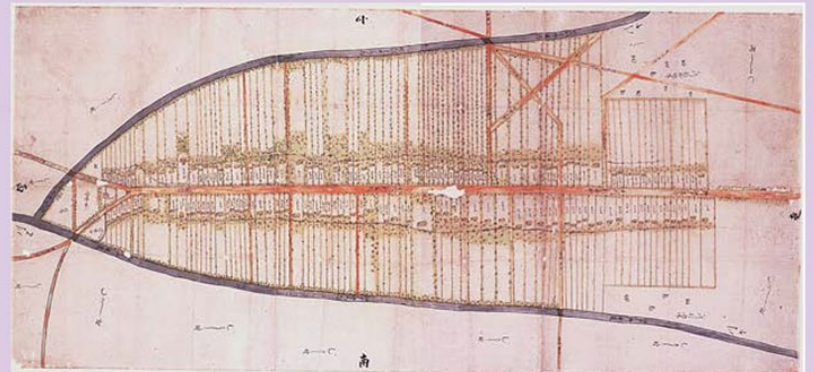
それぞれの地割の青梅街道寄りの部分には、その区画に割り当てら

れた人名や寺院の名が記されていて、農民と思われる名だけでも南北それぞれに75名、今の青梅街道が立川街道と枝分かれした小川三差路の先端部に1名の合計151名が記されています。なかでも北側の中央より西側の特に大きな区画にある「市郎兵衛」は、九郎兵衛の子で小川村の名主をしていた人で、建物もひととき大きく立派に描かれています。

また、北側の「神明免」は小平神明宮、その向かい側の小川寺、小川三叉路の「山王免」と書かれた日枝神社の3つは今でもこの場所にある神社やお寺です。南側中央付近、現在の小平第一小学校のある場所には「妙法寺」と書かれています。これは明治42(1909)年までであったお寺で、今では国分寺市内に移転しています。

この小川寺、妙法寺の前には「寺免」、市郎兵衛の前には「名主免」と書かれているほか、神明宮、日枝神社はそれぞれ「神明免」「山王免」と、「免」の文字がついているのは、年貢が免除された場所であったことを表しています。

さらに、南側東寄りの「天神社」には建物が描かれていませんが、後に社殿が作られ、明治時代まで神社がありました。このほか農民の名前とは思われない「忠庵」が南北に1か所ずつ、「婦庵」が北側に1か所ありますが、これがどのような人物かは、今のところ分かっていません。



〈図2 【小川村地割図】(小平市中央図書館 蔵)〉

絵図の詳しい画像や、書かれた文字の確認は以下のURLから「小川村地割図」で検索し、確認してください。

<https://trc-adeac.trc.co.jp/>



小学生、中学生に読んでもらいたい記事をのせています。読めない字があったら、おうちの人に教えてもらってね。

